



写真:今井明

与野党議員から前向きな発言が相次ぐ

2月23日、ピースデポは、日本平和学会の後援を受け、シンポジウム「北東アジア非核兵器地帯の可能性」を都内で開催した。第2部「議員フォーラム」には、核軍縮に関心を持つ超党派の国会議員ネットワーク「核軍縮・不拡散議員連盟(PNND)・日本」(52名の議員が参加)から各党の議員が参加した。発言順に、赤松正雄(公明党)、猪口邦子(自由民主党)、阿部知子(社会民主党)、井上哲士(日本共産党)、平岡秀夫(民主党)の5名である(赤松、猪口両氏は途中退席)。コーディネーターを田巻一彦(ピースデポ理事)が務めた。以下は各議員の発言要旨である(文責は編集部)。

「理想」をいかに「現実」に近づけるかが課題

赤松正雄(公明党): 湾岸戦争以降、今日までの日本の国際安全保障の分野で、公明党は重要な役割を果たしてきたと自負している。とりわけ平和維持活動(PKO)を日本のなかに定着させる上で、公明党が力を発揮してきたことに異論はないのではないか。現在においては、紛争地域での平和構築で活動する人材育成などの分野にも力を注いでいる。

北東アジア非核兵器地帯構想に関連しては、「理想」をどのように今の日本の政治や国際政治の「現実」に近づけていくのか、というのが非常に大事なテーマであると考えている。あまり認知されていないが、公明党は「新非核三原則」(「作らせず、持たせず、使わせず」)を提案している。これは、自製の念として自国の姿勢を示すのみならず、他国に対する働きかけの側面を持たせることが大事である、との考えに基づいたものだ。広島市の方針のなかにも取り入れられたと聞く。だが、「理想論」としてあまり関心を持たれておらず、残念に思っている。ピースデポのスリー・プラス・スリー構想については、いいのではないか、と思う。

北朝鮮のNPT復帰が<3+3>案実現への第一歩

猪口邦子(自由民主党): スリー・プラス・スリー構想は、非常に結構な考え方だと思う。現実的であり、その枠のなかで追求して当然のことと考える。ただ、韓国・日本・北朝鮮の3か国が核兵器を持たず、一方で中国、ロシア、アメリカの核兵器が不問とされるというのはNPTの差別構造そのままではないか。核兵器国の核軍縮義務を強調する文言を追加するなどの工夫が必要と考える。

北朝鮮が、核兵器及び核施設の完全かつ不可逆的な廃棄を行い、非核兵器国としてNPTに復帰することで、スリー・プラス・スリーの具体的な一歩が踏み出せるだろう。

広島、長崎を抱く国として、核軍縮の旗を掲げ続ける役割がある。被爆国としての最大の強みは被害を訴えること、声をあげていくことにあると思う。ところが核兵器の分野だけではなく国際的に受け止めてもらえない。そこで、対人地雷、小型武器などの被害者が声をあげる活動を行っていくことにより、サバイバーの訴える内容には皆が襟を正して聞くという慣習を国際社会に

作っていく方法が有効と考えた。軍縮大使、議員としての活動を通じてこれを進めてきた。

最近の展開として、河野洋平衆議院議長が主催する「G8議長サミット」の広島開催が決定したことを報告したい。ペロシ米下院議長も広島訪問を希望しており「声をあげる」運動につながる機会となるだろう。

核軍縮で言えば、核分裂性物質生産禁止条約(FMCT、カットオフ条約)の交渉妥結に向けた国際圧力を強めていくべきと考える。NPT非加盟の核兵器保有国も対象とした、平等な核軍縮・不拡散条約を締結することが必要だろう。

ポスト米一国主義の平和戦略を

阿部知子(社会民主党): 日本の外交が見えない。1月に民主党の岡田議員、平岡議員とともにインドを訪問した。米印原子力協定が現実に進んでおりこのままではNPTそのものが内部崩壊する、という現実にもかかわらず、国会審議は進んでいない。米国の一極支配が終わろうとするなか、新たにどういう世界秩序ができていくのか。核の問題を含め、共通の安全保障はどうなるのか。核の問題は、政党や主義主張を問わない人類の課題である。唯一の被爆国と言っている日本が政治のリーダーシップをとれないことに暗澹たる気持ちである。今の日本の政治状況は、本質を見抜けないなかに漂っているように思う。

横須賀の原子力空母問題で、2年ほど前に米国に行き、国防総省や国務省の関係者に会ってきた。米軍事委員会のメンバーにもアプローチを試みた。日米の議員交流はほとんど行われていない。米国の議員の多くが被爆の実相も知らないし、日本の「思いやり予算」のことも知らない。これからの時代において、議員間外交はいっそう重要になるだろう。

中国、インドとの関係の問題も含めて、グローバルに全体を見越したなかに平和戦略を位置づけていくような力量が問われる政治の時代だと思う。ちなみに社民党は2001年に北東アジア非核兵器地帯構想についてペーパーを発表している。

核抑止力を否定し、日本独自のイニシアティブを

井上哲士(日本共産党): 2度にわたって発表されたキッシン

ジャー氏らの論文が大きな波紋を呼んでいるが、オルブライト、コーエン、マクナマラなど歴代の米国務長官や国防長官らの賛同が得られたことが重要な点と考える。米国内で生まれたこうした大きな変化に着目しつつ、北東アジア非核兵器地帯を作っていくうえで、議会としても何をしていくか、政府に何を迫っていくかが大事だ。6か国協議がしっかり進展するための努力を日本が行うことがまず一点。核問題の解決は拉致問題の前進にも繋がる。二点目は、日本自身が核の傘から脱却していくことである。米国が北朝鮮に対し、核兵器の使用や威嚇を行わないとの安全の保証を供与しようとしたことに日本はクレームさえつけている。キッシンジャー氏らの論文のなかでも、核抑止力論は間違いだった、核兵器廃絶は非現実だと自分たちは思ってきたがこちらのほうが現実的であったと結論付けられている。日本政府は、核抑止力にしがみつく政策からの脱却を目指し、その上で日本にしかできないイニシアティブをとるべき。就任以来、福田総理自身の核兵器問題での見解はあまり正面から問われていない。こうしたことも含めて、新しい国際情勢の動きのなかで、日本政府が唯一の被爆国としてどうイニシアティブを発揮するのか、国会で大いに迫って行きたい。

民主党「北東アジア非核兵器条約」案の起草進む

平岡秀夫(民主党):我々の進むべき道は、地域的な集団的安全保障、北東アジアにおいてはヨーロッパ共同体のような地域安全保障の考え方にに基づいたものであるべき、と考える。

2006年8月に民主党の「核軍縮促進議員連盟」(代表:岡田克也、事務局長:平岡秀夫)が設立した。現在、50名弱の議員が参加している。行動力のある議連と自負している。

現在、民主党は、北東アジア非核兵器地帯条約案の策定に向けた準備を進めている。昨年6月に梅林代表からのブリーフィングを受け、その後いろいろな資料を収集して案を作成している。何回かの議論を経て、現在、条約案に対する意見を識者に求めている段階であるが、しかるべきときに正式な組織に持っていきたいと考えている。この条約案は、基本的には<3+3>案をベースとしているが、議定書は仏英両国にも署名開放されている。

条約を実現していくにあたっては、6か国協議との関係が非常に難しい問題である。6か国協議のめざす核施設の無力化や解体が実現することが、この条約に加入する前提条件となるだろう。それから、ピースデポ案にあるように、地域内国家にある米軍事施設についても当然に対象とすること、それから日本の非核三原則を北東アジアに広げていく形の中身も必要であると考えている。また、被爆体験の継承や核軍縮教育といった側面も、他の条約にないものとして、ぜひ実現していきたい。

コーディネーター:ピースデポの<3+3>案に対する見解は。

井上:ひとつの現実的提案と思う。条約の枠組みが先行し、広がることによって、各国のいろいろな動きを伴っていくのだろうと思うが、現実には日本の目前で朝鮮半島の非核化をどうするか、という問題がある。

阿部:2001年に土井さんが提案した構想は、非核地位を宣言しているモンゴルも入れた4か国だった。核問題を本当に時代の要請をするためには、<3+3>という枠を超えて、モンゴルを入れた4か国の非核地帯という方がむしろ現実味があるのでは、と思う。

コーディネーター:原子力の平和利用に関してどうとらえるか。「非核兵器地帯条約」なのか、それとも「非核地帯条約」か。

平岡:意見の集約が難しいこともあり、民主党案では、ピースデポ案と同じく、各国の平和利用の権利を害さない、としている。

井上:国民的合意から行ってもハードルが違う問題となり、さまざまな論点が出てくる。今は、「核兵器の廃絶」という皆が一致できるところを進めていくことが必要では。

阿部:社民党としては、「非核」といときは核兵器のみならず、原子力の平和利用も段階的になくしていこうという姿勢である。現実的な観点から条約にはあえて非軍事利用の権利は入れておいてもよい。逆に言えば、柏崎の事故等々を見ても明らかなように、危険性の高い原子力というのはいずれ淘汰されるというか、そういう運命を背負っているように思う。

コーディネーター:北東アジア非核兵器地帯は日米安保条約と両立するか。

阿部:長年の党の方針との関係もある。答えを留保したい。

井上:理屈では可能であるが、現実には困難ではないか。

平岡:アジアの安全保障において、米国にどのような制約の中で役割を果たさせるか、という問題になる。日本がこうしてほしいんだ、と主張することによって、日米安保との両立は可能と考える。



赤松正雄氏



猪口邦子氏



阿部知子氏



井上哲士氏



平岡秀夫氏

写真:今井明